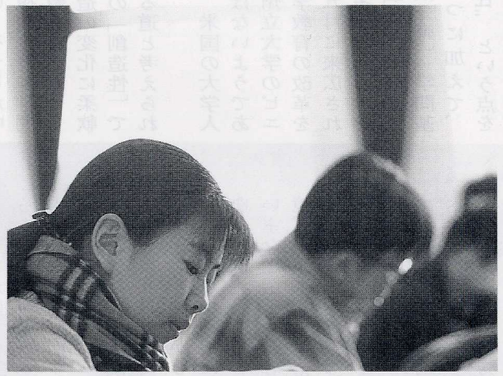
教育実習についての私見

南村俊夫
附属高等学校副校長



写真：経済学部　滝本勇紀

問い直される教育

今、教育が問われている。学校現場では、不登校、いじめ、怠学などの問題行動があちこちに見られ、附属学校園もその例外ではない。教育が問い直されている所以である。

教員養成大学・学部も同じ問題を真剣に取り組んできたし、また、取り組もうとしているところが多くなっている。いろんな大学に見られる実践センターなどの取り組みがそうである。

教育実習の見直し

附属学校園は、教育実習を通して各大学・学部の教員養成の一端を担ってきた。大学・学部の教員養成が見直されようとしている今、その一端を担っている附属学校園も、教育実習の見直しをせねばならないといえよう。

現在の附属学校園の教育実習は、主として教科が中心である。教科の実習以外を行っているところはあまり多いとはいえない。つまり、生徒指導、校務分掌などについての実習は、附属学校園では十分行われているとはいえないと思われる。ホームルームについては、実習生を参加させ、観察させている学校園はあるだろうが、ホームルーム経営まではまず行われていないのが現状ではないだろうか。

附属学校園での実習は、教科の実習で十分であり、それ以外は学校現場に出てやればできる、という見方もある。しかし、多くの学校現場では、大学を出たばかりの新任の先生も、古くからいるベテランの先生も、同じように問題を数多く抱え込まねばならない。新任だからといって問題が少なくなるわけではないし、また、新任を指導するだけの余裕がベテランにはなくなっているとも言えるのである。それだけに、学校現場では、初任者に即戦力になって欲しい、と切に願っているのであり、初任者が長い時間をかけて自ら習得していけるだけの余裕はないと考えているのである。

教科以外の実習をするだけの時間的余裕は附属学校園にはない、という論もあろう。これまた尤もな論に見える。しかし、幼稚園から始まり、小・中・高等学校に至るまで、少子化現象の波は免れず、教員養成大学・学部が一つまた一つと改組され、教員養成の放棄を余儀なくされ、それに伴って、附属学校園の存廃が大きく取り沙汰されている現在、こと教育実習に関して時間的余裕がないとは言えないのではないだろうか。

教員養成系学部の危機と附属学校園の危機

附属の存在の理由は、大きく言って二つある。大学・学部との連携の上に立った教育研究がその一つであり、教育実習がもう一つである。この二つの柱の大きな一つである教育実習の充実には、附属学校園は大学・学部に全面的に協力する必要があるからである。

教員養成系大学・学部の改組は、各都道府県における教員の需要が減少した結果にほかならない。いくら教員養成系大学・学部を卒業しても教員になれないという現実があるのである。大学・学部は改組に至らないまでも統合が行われている場合もある。佐賀大学・長崎大学の例がそうではなかろうか。

このような教員養成系大学・学部の、ある意味での危機は、同様に附属学校園にとっても危機だという考え方がある。なるほどそうかもしれない。だが逆に、附属学校園には好機だ、とも言えないだろうか。大学・学部の教員志望の学生が減少し、教育実習を希望する学生も減っている。そのなかで、附属学校園は、少ない学生にこれまで以上の実習の充実をはかることができるからである。実習の充実とは、教科の実習のみならず、生徒指導、ホームルーム経営、校務分掌などについての実習であるのは言うまでもない。

学校現場においては、生徒指導は教科指導とともに学校教育の大きな柱となっている。生徒指導のない教科指導もなければ、教科指導で万全を期してこそ生徒指導も円滑に行われる。その意味では、生徒指導と教科指導は現場の両輪とでも言うべきものである。その一方が欠ける実習は、実習の意義を大きく損なうものになる。

教科以外の実習を現在の教育実習に組み込むことの必要性

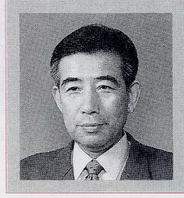
本校の場合を考えてみよう。「附属中・高等学校の実習では、ホームルームに実習生はいっさい出ない。生徒とはほとんど繋がりがない。その分教科指導をゆっくり考えられるともとれるが、私を含め多くの実習生たちは、いつまでたっても単なる客のようで、精神的につらかった。教員を目指す者にとっては、ホームルームなどで生徒の心に近づくのも必要ではないか」。

これは、平成七年度後期の実習生が実習後に提出した感想文の一部である。ホームルームなどに入っていくことが、即、生徒の心を掴むこととは言えないかもしれない。しかし、附属中・高等学校は、それが少しでもできるように周到なメニューを組み、ホームルーム経営に、生徒指導に、さらには校務分掌にと実習生を関与させ、あらゆる機会を通して実習生と生徒の繋がりを図ってやり、教育現場にすぐ対応できるような能力をつけるべく努力をしてやらねばなるまい。その必要性が、実習生の痛切な願いとして、この感想文から窺えるのである。

では、教科以外の実習はどこで、いつ行われるべきなのか。やり方はいくらも考えられる。現在の実習期間を延長することもできよう。大学三年の時に一週間組み込むことも、検討次第ではできるかもしれない。要は、大学・学部と附属学校園との熱意と協力体制次第だと言えないだろうか。

教科以外の教育実習を現在の教育実習に組み込みそれを実効あるものにするには、現在をおいてほかに時期はないように思える。それは、附属学校園の大きな存在意義を新たに問うことにもなるからである。

プロフィール



（みなみむら・としお）
◇一九三五（昭一〇）年二月二十四日生まれ（血液型ＡＢ型）
◇一九五八（昭三三）年三月二十五日広島大学教育学部卒業（高等学校教育科外国語科）
◇一九五八（昭三三）年五月　大分県立佐伯鶴城高等学校教諭、一九六四（昭三九）年四月　広島市立基町高等学校教諭を経て、一九六九（昭四四）年四月　広島大学附属中・高等学校教諭
◇一九九二（平四）年四月　附属中学校教頭、一九九四（平六）年四月　附属高等学校教頭
◇一九五八（昭三三）年から三十八年間の長きにわたり英語教育に専念し、多くの論文、学会発表を行う。また、この間に生徒指導に精励し、今日まで生徒の英作文等の添削を続け、ナンソンの通称で生徒に親しまれている
◇一九七四（昭四九）年三月から十二月まで在外研究員としてシドニー大学教育学部大学院に留学